

## 編集後記

第23号には、論説3本、研究ノート1本が掲載されています。国際的な戦略提携に果たす企業家の役割、ADHDと起業家の関係性、家庭の価値規範と起業の関係性、企業家による技術開発など、企業家（起業家）をめぐる興味深いテーマに対して、多様なアプローチで迫った論稿が揃っています。また、「企業家研究フォーラム20周年記念シンポジウム」の報告として、今後の企業家研究の可能性について、経済学・経営学・経営史の各分野から選ばれた5名の報告内容が簡潔にまとめられています。これらの論稿や報告をみますと、経済学や経営学、理論と歴史、定量的な研究から定性的な研究まで、多様な専門分野やアプローチの研究者が集う企業家研究フォーラムという学会らしさが表れているように感じます。専門分野やアプローチが異なっても、企業家ないし企業家活動という点でつながり、分野を越えて交流できるところに魅力があるように思われます。

書評としては、歴史系3本、経営学系3本の計6本が掲載されています。書評の1つでは、経営学に対する学問性についての問いかけがみられました。過去に本誌に掲載された論稿を振り返っても、企業家研究では、幅広いテーマ設定と多様なアプローチが許容されていることがわかります。この寛容さが専門分野を越えた交流を支えているのかもしれませんが、時に企業家やその活動に関係していれば何でもよいということになってしまう恐れもあるかと思えます。学際的や分野横断的という言葉の響きに惑わされることなく、自らの拠って立つ専門分野の学問性を顧みることも必要であるように感じます。

また、「2023年度年次大会共通論題」として、企業の社会連携活動について、大同生命保険・京都鉄道博物館・有隣会の3つの事例

が掲載されています。企業が行う社会連携活動の負担は少なくないように思われますが、この3つの事例からは、企業や経営者の歴史からもたらされる使命感や責任感のようなものによって支えられているように感じました。企業の社会連携活動の1つの形である企業ミュージアムについては、ゼミや講義などで学生たちに紹介したり、実際に訪問したりすることがあります。工夫の凝らされた展示に企業のこだわりを感じながら、企業や経営者の歴史、現在の製品や技術など、多くのことを学べます。社会貢献として企業が提供してくれる場所や機会を、教育の中で有効に活用することも考える必要があるように思います。

最後になりますが、「FES便り」では、2023年度の「講座・企業家学」について紹介されています。これまで「講座・企業家学」は土曜日に開催されてきましたが、2024年度は平日夜の開催に変更されます。仕事帰りに参加することもできるかと思えます。学会で生み出された知識や共有する知識を社会に還元することは、現在の学会活動に求められている大切な役割です。テーマや内容に応じて関心をもっていただけそうな方にお声掛けいただけましたら幸いです。

(平野 恭平)